

審査論文の要旨

本論文は、日本の長岡京、平安京の造営について瓦を中心に論じ、また、都城周辺の範囲を「近京圏」と呼び、都城造営事業との関わりで捉えることを試みた論文である。瓦という考古学的な資料にもとづきながら、都城とその近郊がいかにか形成されていくかを論じており、延暦から弘仁期にかけての時期的な変化を丁寧にたどりながら、都城造営の経緯を明瞭にした論文であると言える。

長岡京や平安京の造営に対する研究は長い蓄積を持っている、その中で瓦は、多くの遺跡から出土する普遍的な資料であり、また生産地である瓦窯も知られており、造営過程に迫るための有力なツールとなる。これまでの研究では、長岡京の造営過程について、前期造営と後期造営とに分けられ、後期造営が平安京の造営につながるものとして理解する見方が提示されてきた。本論文の結論では、こうした先論を否定し、旧都の瓦の搬入が終始基調となる長岡京の造営に対し、新たに大規模な造営組織を当初から用意した平安京の造営が質的に異なるものであったことを強調する。一方、都城の周辺に形成される近京圏は、長岡京から平安京を通じて形成されており、時期的に変化をたどりながらも、王権との関わりで諸寺、山陵、野、園などが一つの圏域を形成していたと論じている。二つの都を造営した桓武朝において、近京圏という一つの圏域が再編成されたことを物語ると結論づけている。

本論文は、序論、第一部「都城造営と造瓦組織」、第二部「近京圏の形成」、終論から構成される。

序論では、長岡京と平安京の造営史について、瓦の研究を中心に学史をまとめている。長岡京については、これまで支配的な見方であった延暦7年を境に前期造営と後期造営に分ける見方について説明し、当初の内裏である西宮についての調査の進展など、二段階造営説の見直しを迫る事実が積み上がってきていることなど、再考を要する現状を提示する。また、平安宮についても、瓦窯跡の調査が進展し、その順序についても見直しを迫る事実が明らかになっていることに触れ、改めて造瓦組織の展開過程とその性格を論じる必要があることを述べる。また、史料に表れる「京下」を理解するためにも、京の周辺域を近京圏として捉え、その性格を明らかにする必要性を提示する。こうした点を踏まえて、山背遷都の歴史的意義を問うことが不可欠と結んでいる。

第一部は、「都城造営と造瓦組織」とし、長岡京および平安京の造営過程を瓦の需給関係から検討する。長岡京では、旧都である難波宮や平城宮の瓦が多く運ばれており、中心部では8割を占めている。一方、新調された瓦は3群に分けられ、造宮使系造瓦所、勅旨所系造瓦所、内廷官司系造瓦所の順に形成され、朝堂院には造宮使系が、離宮では勅旨所系がもっぱら用いられるように分担が明瞭である。勅旨所系と内廷官司系は延暦10年の山背国の浮図修理に伴って、寺院にも供給されている。造宮使系の一部は平安京の造営にも継承されるが、平安京の造瓦組織は、より大規模に編成されることが特徴である(1章)。

長岡宮の中樞施設については、朝堂院の南面が明らかになったほか、西宮と想定される遺構が判明し、見直しが迫られている。西宮は、延暦8年に東宮に遷居するまでの内裏であるが、東宮と同じく計画的に配置されており、条坊との整合も取れている。こうしたことから長岡京の設計の計画性が評価でき、造営の二段階論は成り立ちにくいことを明示した(2章)。

平安京に瓦を供給した大規模瓦窯は、西賀茂瓦窯を起点に、吉志部瓦窯、栗栖野瓦窯、大山崎瓦窯の順に展開し、当初より窯の規模や構造が統一され、窯の配置も含め、これらの瓦窯間で踏襲されている。瓦の文様や製作技術も共通性がみられ、これらが同じ造営組織に属し、かつ平安宮造営の中樞を担うことから造宮使(職)の関与が想定できる。平安京初期の段階から、大量の新調瓦を生産する体制が成立していたことが明らかであり、再利用瓦が終始重要な位置を占める長岡京とは好対照をなしている(3章)。なお、弘仁期の造瓦を担った大山崎瓦窯もこの一連の造瓦体制を引き継いでおり、文献からは木工寮被官の瓦屋として統括されたと推測する(4章)。

第二部は、「近京圏の形成」とし、長岡京および平安京遷都により都城の周辺域となった地域を固有の領域、近京圏と捉え、その性格について検討する。都城の周辺の諸寺には都城の造営と併行して瓦が供給され修理がおこなわれており、その範囲から近京圏が導かれる(1・2章)。離宮もまた重要な近京圏の要素であり、聖武朝の竹原井頓宮が移建されて山崎の河陽離宮が造営されたことを明らかにし、遷都と離宮の再編が密接に関わると評価した(3・4章)。この近京圏は史料上の「京下」に対応する。平安遷都後は、旧京である長岡京城もこの近京圏に組み込まれ、皇親や寵臣、内廷官司に旧京地の下賜が積極的におこなわれたが、中福地遺跡の調査成果からもこの様子がうかがえる(5章)。また、長岡京南に移転された山背国府もまた、この状況に対応すると考える(6章)。この近京圏を考える上で重視できるのが交通の問題とする。とくに平安京周辺の交通の要地は、政変、天皇の死去などに際して警護の対象となっており、平安京から放射状に派生する諸道の狭隘地もまた警護の対象となっている。こうした交通の要地は都市性を帯びることで共通し、近京圏を構成する要素として理解する(7章)。近京圏の中でみとめられる都市性が中世に継承される要素になるとして高く評価する。

終論では以上の検討を踏まえ、長岡京と平安京の造営における質的な相違に言及する。難波宮や平城宮という旧都の解体に熱心な長岡京造営と新たに大規模な瓦生産体制を組織し造営をおこなった平安京造営という対比から、その造営の目的が明確に異なっていることを明らかにした。その背景に王権の求心力の再生と永続化があったと説く。

また、近京圏の形成については、山背遷都という枠組みで新たな近京圏が創出されたことを明示し、その範囲は天皇の遊獵空間である野の分布範囲と重なり、野には王権に関わる園が存在したことも重視する。山陵も含めた近京圏を維持するため、国府や京外の官衙施設、離宮が設置され、交通網も整備される状況を俯瞰する。こうした近京圏の整備も含め、桓武朝に国家が主導して達成したことを結論づけている。